田嶋智太郎のＦＸレポート

2018.10.25 更新分　　経済アナリスト　田嶋智太郎

■　ますます「ドル一強」の色合いが強まる！

昨日（10/24）のNYダウ平均が600ドル超の下げ（前日終値比）となったことで、執筆時の日経平均株価も前日の終値に比べて700円超の下げとなっている。

正直、目の前で起きている米・日株価急落の“主犯”を特定することはなかなか難しい。それでも、あえて一口に言うならば「先行き不透明感が一層強まっているから」ということになろう。

その不透明感の源というのは、米・中でありサウジアラビアであり、さらにはイタリアや英国であったりする。ことに米中間の対立という意味では、このほど米政府が中距離核戦力全廃条約を破棄する意向を表明したことで、また新たな段階に進んだと見ておかねばなるまい。これは、少なくとも「せいぜい米中間選挙が終わるまでのこと」で済まされる問題ではなさそうだ。

もちろん、現実的には米市場において“FAANG”を中心としたハイテク株がまず売られ、そこで生じた価格変動が「VIX（恐怖）指数」を上昇させた結果、プログラム売買やアルゴリズム取引が活発に行われるようになって、半ば機械的に下げたことが大幅安の背景にはある。つまり、指数の派手な動きほどに実態が深刻なわけでは必ずしもない。

ただ、今は“米中間選挙を間近に控える”という特殊な時間帯にあり、そのこと自体が相場のかく乱要因になっている点が大きい。まして、全体に好調が見込まれる米・日の7-9月期企業決算の発表も本格化してくるのはこれからである。よって、現時点で先行きを過度に悲観視することだけは厳に慎みたい。

ときに、足下で株価の大幅な下げにより市場全体のリスクオフ・ムードが一段と強まってきているわりに、ドル/円が比較的底堅く推移しているという印象もある。それは、もはや「リスク回避ムードが全体に広まったときは円買い」という一時の“ブーム”は去ったということでもあろう。むろん、より正確には「ドル一強」の色合いが一層濃くなっていることになり、それは米大統領自身が招いている事態でもあり、同時にユーロ安やポンド安の裏返しでもある。

とまれ、足下のドル/円は一段の下げに見舞われたとしても、やはり89日移動平均線や一目均衡表の日足「雲」上限がサポート役になりやすいと見られる（下図参照）。その一方で、上値も当面は21日移動平均線が位置する水準あたりまでに限られると見られることから、今しばらく投資妙味が見出しにくい状態は続くと思われる。

一方、ユーロ/ドルは昨日、直近（10/9）安値＝1.1432ドルを下抜け、一時は1.1378ドルまで下押す場面を垣間見ており、場合によっては一段の下値余地を拡げてくる可能性もあると見られる。

一つには、やはりイタリアの予算案の行方に要注目。周知のとおり、イタリア政府は10/23に欧州委員会によって差し戻された予算案の修正案を3週間以内にあらためて提出するよう迫られている。場合によっては、欧州委員会が制裁措置発動の手続きに入る可能性もあり、仮にそうなればユーロ/ドルは8/15安値＝1.1301ドルをも下抜け、一段の下値を模索する段階へと進むだろう。

ちなみに、2017年1月安値から今年2月高値までの上げに対する61.8%押しは1.1200ドル処に位置することとなり、当座はその辺りが一つの目安ということになろう。もちろん、なおもポンド安が続けば、それもユーロの下げにつながりやすい。　　（10月25日　11：.35）